

児童期と青年期における対人受容性の規定要因に関する研究 - 他者との関わり経験, 興味・関心, 知識との関連について -

著者	松本 恵美
雑誌名	東北教育心理学研究
巻	14
ページ	11-20
発行年	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00121900

児童期と青年期における対人受容性の規定要因に関する研究

—他者との関わり経験、興味・関心、知識との関連について—

松本 恵美

(東北大学大学院教育学研究科)

問題と目的

現在の教育現場は、いじめや不登校など、児童・生徒の様々な問題を抱えている。これらの問題の背景の一つとして、対人関係、特に友人関係におけるトラブルが挙げられる。児童・生徒たちにとって、一日の大半を共に過ごす友人や学級集団との関係は快適な学校生活を送る上で重要な位置を占めている。よって、友人や級友との間におけるトラブルを上手く対処できず、良好な友人関係を保つことが出来なくなると、それが原因で仲間外れやいじめに繋がったり、精神的に不安定になり不登校に繋がったりすると考えられる。

いじめや不登校といった問題が急増するのは、小学校高学年から中学校にかけての期間であるとされており(有倉, 2011)、とりわけ小・中学生の友人関係を良好に保っていくことが重要な課題であると言える。問題が急増する理由として、子どもたちの友人関係の容容が挙げられる。児童期後期は友人関係が大きく変容する時期であり、特徴として、少人数で構成される、固定化された仲間集団を形成するようになることが明らかになっている(三島, 2004; 有倉・乾, 2007)。保坂・岡村(1986)は児童期から青年期にかけての仲間集団の発達について検討し、児童期後半からギャンググループ、青年期前期の中学生頃にチャムグループ、高校生頃にピアグループといった仲間集団が出現することを指摘している。3つの仲間集団はそれぞれ異なる特徴を持っており、ギャンググループは、同性の同年齢児から構成されている、排他性や閉鎖性が強い仲間集団であり、同一行動による一体感が重視され、力関係による役割分化が見られる仲間集団であるとされている。2つ目のチャムグループは、互いの共通点を言葉で確認し合い、自分たちが同質であることを重視する関係であり、仲間内で秘密を共有し、個人より集団の意思を尊重し、集団の維持を目的とする仲間集団であるとされている。3つ目のピアグループは、互いの価値観や理想などを語り合う関係であり、互いの違いを認め合い、自立した個人として互いに尊重し合っている集団であるとされている。そして、これら

の仲間集団は、小学生高学年では主にギャンググループ、中学生では主にチャムグループ、高校生では主にピアグループといった形で発達していくと考えられてきたが、現在の友人関係では必ずしもこのように典型的な3つの仲間集団を形成しないことが指摘されている。例えば、國枝・古橋(2006)の小学生の仲間集団の発達について検討を行った研究においては、従来から言われている典型的なギャンググループの特徴を持つ仲間集団はほとんど見られず、グループのメンバーは固定しているがリーダー的人物は存在せず、同一行動があまり見られない仲間集団が多く確認されたことが報告されていた。また、保坂(2010)においては、現代の生徒は、ギャンググループを十分に経験しないままチャムグループを形成しており、仲間に対する同調性が強いチャムグループを高校生段階になっても形成していることなどが指摘されていた。これらのことから、現在の児童・生徒の友人関係の発達を典型的な3種類の形で捉えるのは適切でないと言える。しかし、児童・生徒が児童期後半から固定化した仲間集団を形成するようになることや、年齢にともなって、一体的で同調的な仲間集団から互いの違いを認め合い、尊重し合うような関係に変化していくことは多くの研究で一致した結果として示されており(保坂・岡村, 1986; 落合・佐藤, 1996; 榎本, 1999; 2000; 黒沢・有本・森, 2003; 國枝・古橋, 2006)、仲間集団の特徴の変化を考慮した検討は重要であると言える。

仲間集団を形成するようになると、児童・生徒は、集団で行動することにより、少人数の仲間と強く結びつき、特定の友人に対する親密性が高まるようになる。しかし一方で、自分が所属する仲間集団以外の他者や異質な特徴を持った他者を寄せ付けないといった、排他性も高まることなどが指摘されており(三島, 2004)、児童期の友人関係における問題の原因の一つとして注目されてきた。排他性とは、集団や関係において、「自分の仲間であるかどうかによって相手に対する態度を変えたり、自分の仲間と活動すること比べ、仲間以外の児童と活動することを楽しくないと感じたりする強さ」であるとされている(三島, 2004)。排他性が高いと、仲間以外の児童

に対して閉鎖的になり、仲間外れといった対人関係のトラブルが起りやすいと考えられる。なぜなら、強固な排他性をもつ仲間集団は、他集団との差を明確にし、自集団の基準に合わない他者や、少しでも異質な部分を感じられる個人を排除するようになるからである(石田・小島, 2009; 黒沢, 2011)。竹川(1993)の小学生を対象とした、いじめと友人関係に関する調査においても、いじめのない学級に比べて、いじめのある学級では友人関係がより親密であり、友人でない者同士の関係はより排他的であることが示されている。このような集団からの排除は、関係性攻撃の一つであり、それが継続すると、子どもは不安や孤独感、憂うつ感などが強くなり深刻なダメージを受けることとなる(Gazelle & Ladd, 2003; 佐藤他, 1990; 前田, 1995)。

以上のことから、排他性に着目し排他性を抑制する要因について検討することは有意義であると言える。しかし、他者を仲間集団から排除しようとする「排他性」のみではなく、自集団以外の他者や自分と異なる特徴を持つ他者であっても受け入れようとする「受容性」に着目することも、友人関係における問題を解決する上で重要であると言える。「受容性」は、排他性が高ければ低くなり、排他性が低ければ高くなるという様な、1次元上の両極の関係であると考えられやすいが、先行研究において排他性も受容性も男子より女子の方が高いということが明らかになっており、排他性も受容性も高い生徒がいることが考えられる。よって、「受容性」と「排他性」をそれぞれ独立した要因として捉え、「受容性」に焦点をあてることは重要であると考えられる。

仲間集団への受容やそこからの排除を取り扱った先行研究として Killen らの研究があげられる。Killen らは子どもの仲間集団への「受け入れ」とそこからの「排除」を決定する判断の基準に関する発達的変化の研究を行い、判断基準として社会的カテゴリー(性別や人種など)をとりあげて研究を行った。結果、児童においても青年においても、社会的カテゴリーが仲間集団への「受け入れ」と「排除」の判断、特に「受け入れ」の判断に影響を与えていることや、道徳的に問題があると感じる特徴(暴力をふるうなど)に対しては排除を認める傾向があることなどを明らかにしている(Killen et al., 2001; Park & Killen, 2010)。また渡辺らの研究では、仲間集団への「受け入れ」とそこからの排除を決定する基準として個人レベルの否定的特徴を6つ取り上げて検討を行い、暴力的な特徴や特異な外見の子どもへの受け入れが困難であり、性格が暗いことや異性的ように振る舞うといった特徴を持つ子どもへの受容が容易であることを明らかに

している(渡辺・Chrystal・Killen, 2001; 渡辺・渡邊・Crystal, 2004)。これらの「受け入れ」と「排除」に関する先行研究においては、受け入れる他者の特性に焦点が当てられ、どのような特徴の他者は受け入れやすく、どのような特徴の他者は受け入れにくいのかといった判断基準については研究はなされているが、個人の特性に着目し、その性質を高める要因について検討は行われてきていない。よって本研究では、自集団以外の他者であっても受け入れようとする個人の性質である「受容性」に焦点をあて、「受容性」の規定要因について検討することを目的とする。

受容性に影響を与える要因としてまず、多様な特徴を持つ他者との関わりの経験が考えられる。多様な他者と関わったことがある児童・生徒は、自分と異なる特徴を持つ相手であっても、ネガティブなイメージを持ちにくいことが考えられる。McGlothlin & Killen (2010)の、人種が均一的な学校(全体の85%以上がヨーロッパ系アメリカ人)に通う生徒達と、アフリカ系アメリカ人など多様な人種の子どもの達が在学している学校(ヨーロッパ系アメリカ人は65%以下)に通う生徒達の人種を超えた友情についての考え方の違いを検討している研究においても、人種が均一的な学校に通っている生徒は人種に対して差別的考えを強く持っていたが、多様な人種の生徒がいる学校に通っている生徒は、人種に対しての差別が少なく、他人種の生徒に対して受容的であることが示されていた。また、大概(2006)の外国人との接触と外国人に対する偏見の関連を検討した研究において、能動的な接触経験がある場合の方が受動的な接触経験しかない場合よりも、外国人に対する偏見が低いことが明らかになっている。さらに、老人に対するイメージを形成する要因について検討を行った研究において、祖父母と同居している生徒の方が老人に対する外面的評価が肯定的であること、祖父母とよく話をする生徒の方があまり話をしない生徒より老人に対する内面的評価が肯定的であることが示されていることから、老人との交流経験があることが老人に対する肯定的イメージにつながることを示唆されていた(竹田・太湯, 2002)。これらの先行研究では、特定の特徴を持つ他者と関わると、その特徴を持つ他者に対する偏見や否定的なイメージが減ることが示されている。しかし、特定の特徴に限定せず、自分と異なる様々な特徴の他者と関わった経験があることが、一般他者を受け入れる気持ちに対してポジティブな影響を与えるかについては検討されていない。よって、一般他者に対する受容性に影響を与える要因として他者との関わり経験を取り上げ、検討を行うこととした。

また、接触経験のみでなく、交流する相手に対する興味や関心の程度も受容性に影響を与えることが考えられる。障害者に対する健常学生の抵抗感について検討を行った先行研究において、障害者への関心が高い学生は、障害者に関する態度が好意的あるいは積極的であることや(河内, 1990; 河内・四日市, 1998) ボランティア活動などを自らの意志で行う学生の方が、そうでない生徒より障害者に対する認知や感情が肯定的になることが示されており(河内2003, 2004), 交流する相手に対して関心が高いと相手に対して好意的になることが明らかになっている。これらの先行研究では、障害者に対する興味・関心が障害者への認知に影響を与えることは示されているが、障害者に関わらず様々なことに興味・関心をもっていることが他者を受け入れる気持ち全体に対しても肯定的な影響を与えるかどうかについては明らかにされていない。よって、一般他者に対する受容性に影響を与える要因として、様々な領域に関して興味や関心を持っていることを取り上げ検討することとした。

さらに、幅広い事柄に関して正しい知識を保持していることも受容性を高める上で重要であると考えられる。幅広い興味や関心を持つだけでなく、実際に多くの領域に関する正しい知識を保持していることも、個人の視野を広め、相手に対する偏見を減らす上で重要な要因であると考えられる。障害者に対する態度や反応に関する先行研究において、障害に関する正確な知識を持つものは、障害者を不快に感じないことや(Gething & Wheeler, 1992), 障害者に関する知識持っている人の方が障害者に対して好意度が高く、障害者との交流を推進する気持ちが強いことが示されており(生川, 1995), 障害者に関する知識を保持していることが、障害者への好意的な態度に繋がるのが推測できる。このように、障害者に関わらず、自分と異なる特徴を持つ他者に対する正しい知識を持つことによって、相手に対する否定的なイメージや相手に対する不正確な評価が減少し、相手を受け入れようとする気持ちが高まると推測できる。よって、多くの正しい知識を保持し、自分と異なる特徴を持つ多様な他者の知識を保持している子どもは、自分と異なる特徴を他者と関わる際に否定的なイメージを持ちにくく、相手を受け入れる気持ちが高いと考えられる。以上のことから、本研究では、特定の領域に関する知識だけでなく、幅広く多くの知識を保持していることが、自分と異なる特徴を持つ他者に対する受け入れの気持ちを高めると推測し、3つ目の要因として取り上げる。

また、前述したように、児童期と青年期では友人関係の特徴が異なることが示されており、特徴の違いによ

て受容性に与える影響に違いがみられると考えられたため、小学生と中学生を対象に検討を行うこととした。先行研究において年齢にともなって、互いに尊重し合うような友人関係に変化していくことが示されていることや、中学生の方が小学生より他者との関わり経験が多く、知識も小学生より多く保持していると考えられることから、中学生の方が小学生より、一般他者を受け入れる気持ちが高いことが考えられる。

以上から、本研究では以下の仮説を検討する。

- 仮説1 多様な特徴を持つ他者との関わり経験が多い生徒の方が、一般的な他者に対する受容性が高い。
- 仮説2 広く様々な事柄に対して興味や関心を持っている生徒の方が、狭い生徒よりも一般的な他者に対する受容性が高い。
- 仮説3 知識を多く保持している生徒の方が、知識が少ない生徒より一般他者に対する受容性が高い。
- 仮説4 中学生の方が小学生より一般的な他者に対する受容性が高い。

方 法

調査対象者

公立小学校2校に通う小学5年生114名(男子52名, 女子62名)と、公立中学校1校に通う中学2年生111名(男子63名, 女子48名)の合計225名を対象に調査を実施した。そのうち欠損値を含む生徒を除いた201名(有効回収率89.3%)の回答を分析対象とした。

調査時期

調査は2015年10月の下旬に実施した。

調査手続

各学校の学校長に依頼し、各クラスにおいて担任教諭によって集団で一斉に実施してもらった。

調査内容

- (1) フェイスシート 基本属性として、性別ときょうだいの有無について回答を求めた。
- (2) 一般他者に対する受容性尺度 上村(2007)の他者受容尺度や櫻井(2013)の他者受容尺度を参考に松本(2015)で使用されていた一般他者に対する受容性尺度を改善し、一般他者との関わりにおいて、自分と異なる特徴をもつ相手であっても受け入れようとする気持ちの強さを測定する6項目を作成した。項目は、「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法で回答を求めた。

(3) 他者との関わりの経験尺度 松本 (2015) で使用されていた他者との関わり経験尺度を改善した7項目を使用し、個人が過去に、自分とは異なる特徴を持つ他者とのどのくらい関わったことがあるかを測定した。項目は、「全然ない (1) 」から「たくさんある (5) 」の5件法で回答を求めた。

(4) 興味・関心の広さに関する尺度 松本 (2015) で使用されていた興味・関心の広さに関する項目を修正し、他者との関わり経験尺度内の項目と対応する他文化、障害、高齢者に関する3項目を加えたものを使用した。個人の興味・関心の広さを測定するために、他文化、障害、高齢者、国際関係、災害、芸術、政治、芸能の8領域それぞれについてどれくらい関心があるか回答を求めた。

(5) 知識の広さに関する項目 興味・関心の項目と対応する他文化、障害、高齢者、国際関係、災害、芸術、政治、芸能の8領域についての問題を1問ずつ作成し、5つある選択肢の中から回答を選んでもらった。問題は、調査が行われた時期の過去3か月に起こった主なニュース (2015年7月～2015年9月) に関して聞いたものであった。

結 果

(1) 各尺度の内的整合性の検討

本研究で使用した尺度について内的整合性の検討を行った。一般他者に対する受容性尺度は、6項目の信頼性が $\alpha = .87$ であった。十分な信頼性が得られたと判断し、6項目すべてを採用し分析を進めた。得点化に際しては、「そう思わない」の得点を1点、「そう思う」を5点とし、順に点数をつけた。他者との関わり経験尺度の7項目の信頼性は $\alpha = .82$ であり、十分な信頼性が得られたと判断し、7項目すべてを採用し分析を進めた。また、得点化に際しては、「全然ない」の得点を1点、「たくさんある」を5点とし、順に点数をつけた。興味・関心の広さに関する尺度8項目の信頼性は $\alpha = .84$ であり、

十分な信頼性が得られたと判断し、8項目すべてを採用し分析を進めた。得点化に際しては、「関心がない」の得点を1点、「とても感心がある」を5点とし、順に点数をつけた。知識の広さに関する項目に関しては、一つ一つの項目を各領域に関する独立した知識の問題として取り扱ったため、尺度としての信頼性は求めなかった。得点化に際しては、5つの選択肢の中から正答の選択肢を選んでいた場合は1点、それ以外の項目を選択していた場合は0点とし、8項目の合計点を知識得点として分析に用いた。よって、得点範囲は0点から8点であった。

各尺度の得点化に際しては、加算得点を項目数で割ったものを各尺度得点とした。各尺度の平均得点と標準得点 (SD) を Table 1 に示す。

(2) 他者との関わり経験

過去の他者との関わりの経験によって個人の一般他者に対する受容性に変化が見られるかを検討するために、一般他者に対する受容性得点を従属変数とする $2 (小5 \cdot 中2) \times 2 (男子 \cdot 女子) \times 2 (他者経験高群 \cdot 低群)$ の3要因分散分析を行った (Table 2)。生徒を高群と低群に分ける際には、5段階評定値の理論的中央値である3を基準として、平均得点が3より上の生徒を高群、3以下の生徒を低群とした。結果、学年の主効果 ($F_{(1,193)} = 6.74, p < .05$) と他者経験の主効果が有意であり ($F_{(1,193)} = 4.33, p < .05$)、中学2年生の方が小学5年生より一般受容性が高く、他者経験高群が低群より一般受容性が高かった。また、学年 \times 他者経験の一次交互作用も有意であったことから ($F_{(1,193)} = 3.92, p < .05$)、単純主効果検定を行ったところ、中学2年生において他者経験の単純主効果が有意であり ($F_{(1,193)} = 6.41, p < .05$)、他者経験高群の方が低群より一般受容性が高かった。また、小学5年生においても他者経験の単純主効果が有意であり ($F_{(1,193)} = 5.50, p < .05$)、他者経験高群のほうが低群より一般受容性が高かった。さらに、他者経験低群において学年の単純主効果が有意であり ($F_{(1,193)} = 6.52, p < .05$)、中学2年生の方が小学5年生より一般受容性が高かった。

Table 1 各尺度得点と標準偏差

	小学5年生			中学2年生			全体		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
一般的他者に対する受容性	3.35(0.94)	3.70(1.06)	3.53(1.01)	3.63(0.85)	3.91(0.89)	3.75(0.80)	3.50(0.90)	3.79(0.91)	3.64(0.92)
他者との関わりの経験	3.93(0.66)	3.90(0.85)	3.92(0.76)	3.79(0.73)	3.93(0.70)	3.85(0.72)	3.86(0.70)	3.91(0.78)	3.88(0.74)
興味・関心	3.45(0.60)	3.44(0.86)	3.44(0.75)	3.09(0.82)	3.26(0.74)	3.16(0.79)	3.25(0.75)	3.36(0.81)	3.30(0.78)
知識	4.54(1.56)	4.31(1.69)	4.42(1.63)	5.63(1.14)	5.67(1.15)	5.65(1.14)	5.13(1.45)	4.92(1.62)	5.02(1.53)

Table2 性別×学年×他者経験の3要因分散分析の平均値と標準偏差

他者経験	小5			中2			全体			
	低群	高群	全体	低群	高群	全体	低群	高群	全体	
男子	n	3	45	48	7	49	56	10	94	104
受容性平均	2.67	3.39	3.35	2.50	3.64	3.63	3.25	3.52	3.50	
SD	1.20	0.92	0.94	0.55	0.89	0.85	0.83	0.91	0.90	
女子	n	7	47	54	2	41	43	9	88	97
受容性平均	2.62	3.86	3.70	4.00	3.90	3.91	2.93	3.88	3.79	
SD	1.22	0.94	1.06	0.24	0.71	0.69	1.22	0.84	0.91	
全体	n	10	92	102	9	90	99	19	182	201
受容性平均	2.63	3.63	3.53	3.61	3.76	3.75	3.10	3.69	3.64	
SD	1.15	0.96	1.01	0.53	0.82	0.79	1.02	0.89	0.92	

よって、過去に様々な他者と関わった経験が多い生徒の方が、経験が少ない生徒よりも一般他者を受け入れる気持ちが高いことが示された。また、交互作用の結果から、他者との関わり経験が少ない児童・生徒において、中学2年生の方が小学2年生より他者を受け入れる気持ちが高いことが示された。

(3) 興味・関心の広さ

興味や関心が広いことが個人の一般他者に対する受容性に影響を与えているかについて検討するために、一般他者に対する受容性得点を従属変数とする2(小5・中2)×2(男子・女子)×2(興味・関心高群・低群)の3要因分散分析を行った(Table 3)。児童・生徒を高群と低群に分ける際には、5段階評定値の理論的中央値である3を基準として、平均得点が3より上の生徒を高群、3以下の生徒を低群とした。その結果、性別の主効果が有意であり($F_{(1,193)}=6.26, p<.05$)、女子の方が男子より一般他者に対する受容性が高いことが示された。また、興味・関心の主効果も有意であり($F_{(1,193)}=15.46, p<.01$)、興味・関心得点高群の方が低群よりも一般他者に対する受容性が高いことが示された。なお、学年×興味・関心の一次交互作用が有意であったことから($F_{(1,193)}=8.88, p<.01$)単純主効果検定を実施したところ、小学5年生

において、興味・関心の単純主効果が有意であり($F_{(1,193)}=10.79, p<.01$)、興味・関心高群のほうが低群より一般他者に対する受容性が高かった。また、中学2年生において、興味・関心の単純主効果が有意傾向であり($F_{(1,193)}=3.05, p<.10$)、興味・関心高群のほうが低群より一般受容性が高い傾向にあることが示された。よって、興味・関心の幅が広い生徒の方が狭い生徒より一般他者を受け入れる気持ちが高いことが示された。さらに、興味・関心低群において、学年の単純主効果が有意であり($F_{(1,193)}=8.55, p<.01$)、中学2年生のほうが小学5年生より一般他者に対する受容性が高いことが示された。

(4) 知識の広さ

幅広い領域に関する知識を持っていることが個人の一般他者に対する受容性に影響を与えているかについて検討するために、一般他者に対する受容性得点を従属変数とする2(小5・中2)×2(男子・女子)×2(知識高群・低群)の3要因分散分析を行った(Table 4)。生徒を高群と低群に分ける際には、知識の合計得点である8点の理論的中央値である4.5を基準とし、合計得点が4.5以下の生徒を低群、4.5より高い生徒を高群とした。その結果、有意差は認められなかった。

Table3 性別×学年×興味関心の3要因分散分析の平均値と標準偏差

興味関心の広さ	小5			中2			全体			
	低群	高群	全体	低群	高群	全体	低群	高群	全体	
男子	n	7	41	48	16	40	56	23	81	104
受容性平均	2.60	3.48	3.35	3.34	3.74	3.63	3.12	3.60	3.50	
SD	0.73	0.92	0.94	0.97	0.79	0.85	0.95	0.86	0.90	
女子	n	12	42	54	14	29	43	26	71	97
受容性平均	2.81	3.95	3.70	3.99	3.87	3.91	3.44	3.92	3.79	
SD	1.22	0.86	1.06	0.63	0.73	0.69	1.11	0.81	0.91	
全体	n	19	83	102	30	69	99	49	152	201
受容性平均	2.73	3.72	3.53	3.64	3.79	3.75	3.29	3.75	3.64	
SD	1.05	0.92	1.01	0.88	0.76	0.80	1.04	0.85	0.92	

Table4 性別×学年×知識の3要因分散分析の平均値と標準偏差

学年	小5			中2			全体			
	知識の広さ	低群	高群	全体	低群	高群	全体	低群	高群	全体
男子	n	36	12	48	28	28	56	64	40	104
	受容性平均	3.38	3.24	3.35	3.50	3.75	3.63	3.43	3.60	3.50
	SD	0.90	1.09	0.94	0.82	0.88	0.85	0.86	0.96	0.90
女子	n	38	16	54	18	25	43	56	41	97
	受容性平均	3.61	3.90	3.70	3.96	3.87	3.91	3.73	3.88	3.79
	SD	1.12	0.89	1.06	0.80	0.62	0.69	1.03	0.73	0.91
全体	n	74	28	102	46	53	99	120	81	201
	受容性平均	3.50	3.61	3.53	3.68	3.81	3.75	3.57	3.74	3.64
	SD	1.02	1.02	1.01	0.84	0.76	0.80	0.95	0.86	0.92

(5) 要因の関連性について

一般他者に対する受容性と他者経験、興味・関心の広さ、知識の広さ、性別、学年の関係性を調べるために、一般受容性を従属変数、他者経験、興味・関心の広さ、知識の広さ、性別、学年を独立変数とする重回帰分析を行った。なお、変数は強制投入とした。重回帰分析の結果、重決定係数は.137であり、1%水準で有意な値であった。それぞれの独立変数から従属変数への標準偏回帰係数は、Table 5に示す通りである。他者経験、興味・関心、性別、学年において有意な正の影響が示され、知識のみ有意な影響が示されなかった。なお、多重共線性の診断を行ったところ、全ての項目において、数値が2以下であったので、多重共線性は生じていないと判断した(VIF値は1.00～1.12)。

Table5 重回帰分析の結果

	β
他者経験	0.175 **
興味関心	0.239 **
知識	0.034
性別	0.187 **
学年	0.157 *
R ²	0.137 **

*p<.05, **p<.01

考 察

本研究は、一般他者に対する受容性に着目し、児童期および青年期における一般他者に対する受容性がどのような要因から影響を受けるかについて検討を行った。従来の友人関係に関する研究においては、排他性に焦点があてられたものが多く、受容性を取り入れた研究はあまり行われてこなかった。また、集団への「受け入れ」と「排除」に関する先行研究においては、受け入れる他者の特

性にのみ焦点が当てられており、個人の特性である「受容性」に焦点をあて、受容性を高める要因について検討されている研究は見当たらなかった。そのため本研究では、受容性に影響を与える要因として「他者との関わり経験」、「興味・関心の広さ」、「知識の広さ」を取り上げそれぞれの要因が受容性に影響を与えるかについての調査を行った。また、受容性の発達の変化についての検討も行った。

一般受容性の規定要因についての検討

仮説①では、一般他者に対する受容性の規定要因として「他者との関わり経験」を取り上げ検討を行った。分析の結果、過去に自分と異なる特徴を持つ他者と多く関わったことがある児童・生徒の方が、経験が少ない児童・生徒より自分と異なる特徴を持つ一般他者を受け入れようとする気持ちが強いことが示された。よって、仮説①は支持され、小・中学生において過去に自分と異なる特徴を持つ他者と関わるのが個人の一般他者に対する受容性を高めることが明らかとなった。McGlothlin & Killen (2010)の研究において、多様な人種の生徒と関わる機会が多い生徒の方が他人種に対しての差別的思考が減り受容的になることが示唆されているように、自分と異なる様々な特徴を持つ他者と関わった経験が多い生徒は、その他者が持つ特徴に対して差別的思考やネガティブなイメージが減少すると考えられる。よって、過去に多様な他者と関わり経験を持つ児童・生徒は経験が少ない児童・生徒より、相手に対する偏見やネガティブなイメージが低くなるため、受容的になるのではないかと考えられる。また、他者経験が少ない児童・生徒において、学年差が見られ、中学2年生の方が小学5年生より受容性が高いことが示された。よって、他者経験が多い児童・生徒の場合は他者経験が受容性に与える影響が大きいと学年による影響は顕著ではなくなるが、他者経験が少ない児童・生徒の場合は他者経験が受容性に与える影響が小さいため、学年による影響が表れてくる

ことが考えられる。

仮説②では、一般受容性の規定要因として個人の興味・関心の広さを取り上げ検討した。分析の結果、幅広く多様な領域に対して興味・関心を示す生徒の方が興味・関心の範囲が狭い生徒より、自分と異なる特徴を持つ一般他者を受け入れよう思う気持ちが強いことが示された。よって、仮説②は支持された。仮説が支持された理由として、様々な領域に対して関心が高い生徒は、自分と異なる特徴を持つ他者に対しても積極的に関わっていこうとする気持ちが強いことが考えられる。多様な事柄や他者に対して興味・関心が高いので、自分と異なる他者と出会った時もすぐに排除しようとするのではなく、相手と好意的に関わり、相手のことを知ろうとするのでないかと推測できる。河内(2004)の、障害者に対する抵抗感を軽減させる要因を検討している研究においても、障害者に対する関心度の高さが障害者と交流しようという積極的な意識を助長することが示されており、本研究の結果はそれを支持するものであったと言える。また、興味・関心が狭い児童・生徒において、学年差が見られ、中学2年生の方が小学5年生より受容性が高いことが示された。よって、興味・関心の幅が広い児童・生徒の場合は興味・関心の広さが受容性に与える影響が大きい場合、学年による影響は顕著ではなく、興味・関心の幅が狭く、興味・関心が受容性に与える影響が小さい場合は、学年による影響が表れてくることが考えられる。

仮説③では、一般受容性の規定要因として個人の知識の広さを取り上げ検討した。分析の結果、知識の幅が広い生徒と狭い生徒の間には有意な差は認められなかった。よって、仮説③は支持されなかった。この結果から、幅広い知識が受容性に影響を与える程度が大きくないことが示唆された。豊村・笹尾(2009)の障害者への受容的態度に影響を与える要因を検討する研究において、知識は受容的態度に関連はしているが、関連性の程度はそれほど大きくないことが示されており、「知識の広さ」は受容性に影響を与える要因として「他者との関わり経験」や「興味・関心の広さ」比べて影響が小さいことが考えられる。また、本研究で測定した知識が、個人の知識の広さを正確に測定できていなかった可能性も考えられるため、知識については、今後さらに検討を重ねる必要があるだろう。

仮説④では、学年によって個人の一般他者に対する受容性に違いが見られるかについて検討を行った。分析の結果、他者経験が少ない児童・生徒において、中学2年生の方が小学5年生より一般受容性が高いことが示され

た。また、興味・関心が狭い児童・生徒においても、中学2年生の方が小学5年生より受容性が高いことが示され、受容性に与える学年の影響が示された。この結果から、仮説4は支持され、年齢が上がるにつれて、個人の受容性は高まることが明らかとなった。これは、年齢が上がるにつれて、互いを尊重し合うような関係に変化していくようになることを示した先行研究(保坂・岡村, 1986; 落合・佐藤, 1996; 榎本, 1999; 2000; 國枝・古橋, 2006)を支持するものであった。しかし、他者経験が多い児童・生徒や興味関心が広い児童・生徒において、学年差が見られなかったことから、他者経験や興味関心の広さといった要因と比べると学年が与える影響は小さいことが示唆された。

要因の関連性についての検討

要因間の関係性を検討するために、重回帰分析を行ったところ、他者との関わり経験が多い児童・生徒、様々な領域に関して興味・関心が高い児童・生徒、学年が上の生徒は一般他者を受け入れる気持ちが強いことが示された。これは仮説の①, ②, ④を支持する結果であった。また、女子児童・生徒の方が男子児童・生徒より一般他者に対する受容性が高いことが示された。これは、友人関係において女子児童・生徒が「誰とでも仲良くしたいという付き合い方」や「みんなから好かれることを願っている付き合い方」を好み誰とでも仲良くしようする意識が高い(落合・佐藤, 1996)ため、受容性が男子より高かったことが考えられる。しかし、誰とでも仲良くしたいと個人で思っている、自分が所属する仲間集団の排他性が高い場合、仲間集団の排他性に影響を受け個人も排他的な振る舞いをするようになることが考えられる。特に女子の方が仲間からの排除に敏感であると言われるため(Killen & Stangor, 2001)、仲間集団からの影響が大きいことが考えられる。よって、今後要因として仲間集団の特徴や仲間集団の排他性など、仲間集団に関する要因を取り入れた検討が必要であると考える。

最後に本研究の課題として、一般他者に対する受容性と受容性に関わる要因間の関係性についての検討が不十分であることが挙げられる。本研究では個人の受容性に焦点をあて、受容性の規定要因に関する検討を重点的に行った。そのため、要因間の関係性について詳細に検討を行うことができなかった。また、本研究で取り上げた要因に加えて、個人の「排他性の高さ」や、個人が所属している「仲間集団の特徴」なども受容性と関連していると考えられるため、これらの要因も含めた要因間の関係性の検討が今後必要であると考える。

文 献

- 榎本淳子.(1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化. 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子.(2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. 教育心理学研究, 48, 444-453.
- Gazelle, H., & Ladd, G. W. (2003). Anxious solitude and peer exclusion: A diathesis-stress model of internalizing trajectories in childhood. *Child Development*, 74, 257-278.
- Gething, L., Wheeler, B. (1992). The interaction with disabled persons scale: A new Australian instrument to measure attitudes towards people with disabilities. *Australian Journal of Psychology*, 44, 75-82.
- 保坂亨・岡村達也.(1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・療的意義の検討. 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- 保坂亨.(2010). いま, 思春期を問い直す: グレーゾーンに立つ子どもたち. 東京: 東京出版会.
- 石田靖彦・小島文(2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連: 仲間集団の形成・所属動機という観点から. 愛知教育大学研究報告教育科学, 編58, 107-113.
- 河内清彦.(1990). 肢体不自由者(児)に対する大学生の態度構造とその形成要因としての専攻学科および性別の役割について. 特殊教育学研究, 28 (3), 25-35.
- 河内清彦.(2003). 「障害学生との交流自己効力感汎用型尺度」の妥当性の検討. 特殊教育学研究, 40 (5), 451-461.
- 河内清彦.(2004). 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件, 対人場面及び個人的要因の影響. 教育心理学研究, 52, 437-447.
- 河内清彦・四日市章.(1998). 感覚障害学生とのキャンパス内交流に対する健常学生の自己効力に関する研究. 教育心理学研究, 46, 106-114.
- Killen, M. & Stangor, C. (2001). Children's social reasoning about inclusion and exclusion in gender and race peer group contexts. *Child Development*, 72 (1), 174-186.
- Killen, M. & Pisacane, K. & Lee-Kim, J. & Artila-Rey, A. (2001). Fairness or stereotypes? Young children's priorities when evaluating group exclusion and inclusion. *Developmental Psychology*, 37 (5), 587-596.
- 國枝幹子・古橋啓介.(2006). 児童期における友人関係の発達. 福岡県立大学人間社会学部紀要, (15), 105-118.
- 黒沢幸子.(2011). 思春期臨床と親支援: 同質と異質のはざままで. 臨床心理学, 11 (4), 604-611
- 黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和.(2006). 仲間集団から内在化される集団境界の評定. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程紀要, 53, 21-28.
- 前田健一(1995). 児童期の仲間関係と孤独感: 孤独性, 引っ込み思案および社会的コンピテンスに関する仲間知覚と自己知覚. 教育心理学研究, 43, 156-166.
- 松本恵美.(2015). 児童期と青年期における対人受容性に関する研究. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 64, 105-116.
- McGlothlin, H. & Killen, M. (2010). How Social experience is related to children's intergroup attitudes. *European Journal of Social Psychology*, 40, 625-634.
- 三島浩路.(2004). 友人関係における親密性と排他性: 排他性に関する問題を中心にして. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 51, 223-231
- 生川善雄.(1995). 精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究: 態度と接触経験, 性, 知識との関係. 特殊教育学研究, 32 (4), 11-19.
- 落合良行・佐藤有耕.(1996) 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化. 教育心理学研究, 44 (1), 55-65.
- 大槻茂美.(2006). 外国人接触と外国人意識: JGSS-2003データによる接触仮説の再検討. 日本版 General Social Surveys 研究論文集 (5).
- Park, Y. & Killen, M. (2010). When is peer rejection justifiable? Children's understanding across two cultures. *Cognitive Development*, 25, 290-301.
- 櫻井英未.(2013). 女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係. 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 19, 125-142.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山敏(1990). 仲間関係に問題をもつ子ども: 自己知覚測定による分析. 宮崎大学教育学部紀要教育科学, 68, 9-18.
- 竹田恵子・太陽好子.(2002). 中学生の老人イメージとその形成に関連する要因. 川崎医療福祉学会誌, 12(1), 161-167.
- 竹川郁雄(1993). いじめと不登校の社会学: 集団状況と同一化意識. 法律文化社.
- 豊村和真・笹尾絵梨.(2009). 障害者に対する態度に関

- する横断的研究(2):受容的態度と関連する知識項目に関する検討.北星学園大学社会福祉学部北星論集,46, 1-14
- 上村有平.(2007).青年期後期における自己受容と他者受容の関連:個人志向性・社会志向性を指標として.発達心理学研究, 18 (2), 132-138.
- 渡辺弘純・Crystal, D. S.・Killen, M.(2001).人間の異質性への寛容:児童生徒の集団への「受け入れ」の発達に関する日米比較研究.愛媛大学教育学部紀要, 47,39-58.
- 渡辺弘純・渡邊,俊・Crystal, D. S.・中嶋恵美.(2004).日本の児童生徒における希望,信頼,寛容の発達とその相互的関連.愛媛大学教育学部紀要,50,17-35.
- 有倉巳幸・乾丈太.(2007).児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究.鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編,58,101-107.
- 有倉巳幸.(2011).生徒の仲間集団の排他性に関する研究.鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 21, 161-172.

児童期と青年期における対人受容性の規定要因に関する研究
—他者との関わり経験, 興味・関心, 知識との関連について—

本研究は、児童期と青年期における一般他者に対する受容性の規定要因を明らかにすることを目的とした。本研究では、小学5年生114名(男子52名, 女子62名)と、中学2年生111名(男子64名, 女子48名)の合計225名を対象に調査を実施した。受容性の規定要因として「他者との関わり経験」, 「興味関心の広さ」, 「知識の広さ」を取りあげ、受容性に影響を与えているかについて検討を行った。また、受容性の発達的变化についての検討も行った。その結果、過去の他者との関わり経験が多い児童・生徒は受容性が高いこと、幅広い領域に対して高い興味関心を示す児童・生徒は受容性が高いこと、中学生の方が小学生より受容性が高いことが示された。よって、受容性には「他者との関わり経験」および「興味関心」の広さが影響を与えていること、また年齢が上がるにつれて、受容性が高まることが明らかとなった。

キーワード：受容性, 対人関係, 児童期, 青年期

Determinants of Interpersonal Acceptability in Elementary and
Secondary School Students

The purpose of the present study was to examine the effect of "the experience of the interaction with various people", "the interest", and "the knowledge" on student's interpersonal acceptability, and to examine the development of interpersonal acceptability. Subjects were 114 fifth grade students (52 boys and 62 girls) and 111 eighth grade students (64 boys and 48 girls). Main results were as follows: (1) Children who had more experience of the interaction with various people possessed higher interpersonal acceptability. (2) Children who had wider interest possessed higher interpersonal acceptability. (3) Secondary school students had higher acceptability than elementary school students. It was suggested that the interpersonal acceptability was influenced by the experience of the interaction with various people and the width of the interest, and that the interpersonal acceptability increased with age.

Key words: Interpersonal acceptability, Interpersonal relation, Elementary school children, Secondary school students